

6月23日 うそ

厳しい上に人一倍心配性の父が恐かった。だから、子どもの頃、うそばかりついていた。自分の不注意で失敗たし事をことさらひどく叱る父だった。そして、誰かのせいで惨めな思いをさせられたときに、加害者に強く抗議するそんな父だった。

小学校のとき、校庭にあったシーソーで遊んでいて目の上に大きなたんこぶをつくったことがある。相手が反対側に座ったときにシーソーの板が私のおでこを直撃したのだ。幸い大事には至らなかったが、目の上が大きく腫れ上がり青あざができた。こっそり薬を塗って治す程度のけがではなかった。当然父に攻められた。

「おまえ、そのたんこぶどうしたんや」「鉄棒にぶら下がろうとしたときに誰かが下をくぐって僕の足にぶつかって……、鉄棒に頭をぶつけたんや」。反射的にうそをついた。天才的だった。これなら自分の不注意でもないし、父に攻撃される特定の人物もいない。しかし、それで納得する父ではなかった。「いつ、どこでけがしたんや」、「周りを見てたやつはいないんか」、「先生にいうたんか……」。その都度うそをついた。なんとかその時間は乗り切ることができたが、相手も手強かった。父はその後帰ってきた兄に私のけがの話をした。兄も矢継ぎ早に父と同じような質問を私にぶつけた。またうそで応戦した。姉が帰ってきた。また父は私のけがの話をして仕向けた。姉の質問に私はまたうそをついた。

それから一週間ほど後に法事があった。まだ目の上に青あざがある私を見て、親戚のおじさんが尋ねた。父はいきさつを説明し始めた。おばさんが「かわいそうに」と私の頭をなでた。

私は一つのうそのためにその後何十回とうそをついた。そして、うそに疲れてしまった。

